＜ お知らせ報告３ ＞

ｖ３閲覧版　差分報告

HONNEN SEISEI ＝ ENGI KENGEN

本然生成＝縁起顕現　理論体系

論文集・意識サイクル v3

差分レポート ― v2閲覧版から v3閲覧版へ

出版プロジェクトチーム向け
２０２６年５月４日

◆ EXECUTIVE SUMMARY

本レポートは、報告３（v1→v2）に続いて、v2閲覧版（2026年4月23日提出）から v3閲覧版（2026年5月4日確定）への差分を網羅的に記述したものである。

今回の改訂の起点は、**解体新書 優しい版 第14章「恒常性――変容を阻む力の正体」**の執筆作業中に立ち上がった一つの問い ―― **「ここに於ける恒常性は、場の量子論（QFT）の事ではないか？」** ―― である。学術的事実として、ホメオスタシスの量子論的定式化、QED Coherence による生体秩序生成、自発的対称性の破れ（SSB）、量子生物学等の研究が既に立っていることが確認された。

三座標構造（基底→運用→実装）の原則上、実装（解体新書）で「恒常性」を立てるためには、基底（第十一論文）にそれらとの学術的対話を構造的に明示する必要がある。よって **第十一論文（恒常性）の改訂を起点**として、関連論文（第一・第二・第六・第十・第十二・第十三・第十六・第十七・第十八）へ連動的に展開された。これが **「基底→運用」原則の徹底** として今回の改訂の核心となっている。

核心命題に変更はなく、いずれも現行定義の精緻化と書き換え強化の側面を持つ。本レポートでバージョン番号は2026年4月23日提出版、バージョン3は2026年5月4日確定の最新版を指す。ファイル名はすべて _v3 で代表する。

1．v2版とv3版の対応

資料	v2版	v3版	主な変更
論文集 原文版 閲覧_論文原文冊子	214p・全22本＋統括	226p・全22本＋統括	改訂10論文の差し替え（+12ページ）
論文集 分かり易い版 閲覧_論文簡易冊子	58p・25章	58p・25章	第十五・第十七論文の軽微な語彙改訂
意識サイクル 原文版 閲覧_意識原文冊子	238p・⑱4本＋⑳⑳	235p・⑱4本＋⑳⑳	⑯⑱A⑲⑲補稿の改訂(4箇所)
意識サイクル 分かり易い版 閲覧_意識簡易冊子	283p・⑱4本	283p・⑱4本	⑯第5節・⑲補稿の⑳接続加筆

2．論文集 原文版 の差分

2-1. 改訂の経緯（恒常性論文を起点とする展開）

本改訂の起点は、**解体新書 優しい版 第14章「恒常性——変容を阻む力の正体」**の執筆作業中に立ち上がった以下の問いである。

> **◆ 問いの立ち上がり（2026年4月30日）**
>
> 「ここに於ける恒常性は、場の量子論（QFT）の事ではないか？　一般的な学術定義と照らし合わせたい」

この問いを受けて、**ホメオスタシス・場の量子論（QFT）・量子生物学・QEDコヒーレンス**の最新研究を確認したところ、学術的事実として次の対応が既に立っていることが確認された。

- **ホメオスタシスは量子論の固有方程式で表せる**（学術論文として提案済み）
- **生体の構造的・機能的秩序は、QFTにおける自発的対称性の破れ（SSB）によって動的に生成される**（QED Coherence 研究）
- **量子コヒーレンスによるアイデンティティ保存**（2025、bioRxiv: Sustaining Superoperator）
- **南部・ゴールドストーン粒子、ヒッグス機構**などが、生体の秩序生成に関連
- **量子生物学（Quantum Biology）**は独立分野として確立されつつある

三座標構造（基底→運用→実装）の原則上、実装（解体新書）で「恒常性」を立てるためには、基底（第十一論文）にそれらとの**学術的対話を構造的に明示する**必要がある。実装側で「恒常性」を立てたとき、それが本書独自の用語ではなく、QFT で扱われる生体の量子的安定性と**構造的に対応する**ものであることが、基底論文に支えられていなければ、第14章の説得力が立たない。

そのため、第十一論文（恒常性）の改訂を起点として、関連論文（第一・第二・第六・第十・第十二・第十三・第十六・第十七・第十八）へ連動的に改訂が展開された。なお、第十一論文の立場は **QFT を「援用する」のではなく「対話相手として明示する」**ものであり、実体・連続性・エネルギー流・最適化継続という前提を外し、**差異配列の再成立という単一原理**として再定義する形而上学的枠組みは保持されている。

2-2. 改訂10論文の主旨

上記経緯を受けた改訂10論文の主旨は次の通り。**第十一論文（恒常性）が今回改訂の起点**であり、関連論文へ連動的に展開された。

#	論文	改訂の主旨
1	第一論文 未分化差異の構造的定義	語彙整合（因果語彙→構造記述語彙）
2	第二論文 縁起顕現の構造的定義	語彙整合（因果語彙→構造記述語彙）
3	第六論文 観測の構造的定義	語彙整合（因果語彙→構造記述語彙）
4	第十論文 通過・器・表現の構造的定義	語彙整合（因果語彙→構造記述語彙）
5	第十一論文 恒常性の構造的定義	**QFT・量子生物学等との学術的対話の明示化** — 今回改訂の起点
6	第十二論文 自我の自己指示的閉鎖の構造的定義	語彙整合（因果語彙→構造記述語彙）
7	第十三論文 神経系の構造的定義	**フラクタル概念の導入**
8	第十六論文 相転移の構造的定義	**「統合」語彙の排除**
9	第十七論文 曼荼羅構造の構造的定義	**本然・色相の関係構造の精緻化**
10	第十八論文 感謝の構造的定義	**因果語彙の整理**

2-3. 主要改訂の詳細

核心的な改訂を含む4論文（第十一・第十三・第十七・第十八）について、変更前後の記述を以下に示す。

論文	主旨	変更前 → 変更後
第十一論文 恒常性	**QFT・量子生物学等との学術的対話の明示化** 改訂の起点	既存の対話相手（ホメオスタシス・オートポイエーシス・散逸構造・自己組織化理論・自己組織化臨界・プロセス哲学・情報理論・統合情報理論）に加えて、**場の量子論（QFT）・QEDコヒーレンス・自発的対称性の破れ（SSB）・ヒッグス機構・南部・ゴールドストーン粒子・量子生物学**を学術的対話相手として明示。これらが共有する前提（実体・連続性・エネルギー流・因果・情報統合・最適化継続）を外し、**差異配列の再成立という単一原理**として再定義する立場を明確化した。 QFT を「援用する」のではなく「対話相手として明示する」立場。実装（解体新書 第14章）で恒常性を立てる際の構造的根拠となる。
第十三論文 神経系	**フラクタル概念の導入**	**変更前**:「神経系とは縁起の網が局所的に形をとった構造である」 → **変更後**:「神経系とは**縁起網のフラクタルな局所顕現である**」 **追加**:「ここでいう『フラクタル』とは、縁起の構造が異なるスケール（細胞・組織・個体・社会）にわたって同型的に再現されているという構造的同型性の記述である。」 単一スケールの局所構造から多スケール同型性を持つ構造として再定義することで、第十三論文（神経系）と⑱A（意識サイクル）が同一概念で記述される。

論文	主旨	変更前 → 変更後
第十七論文 曼荼羅構造	**本然・色相の関係構造の精緻化／「統合」語彙の排除**	**役割の明確化**:本然曼荼羅＝**理の構造図**、色相曼荼羅＝**智の作用図**として明示。 **変更前**:「本然曼荼羅と色相曼荼羅が**統合された**ものが宝塔である」 → **変更後**:「本然曼荼羅と色相曼荼羅は、**最初から一つのものの二側面として同時成立**している。これは『統合』されるのではない。手放したとき、両者が指し示していたものは最初からここにあったと顕れる。」 「統合」操作を排除し、最初から成立している二側面の構造として再定式化。⑳との接続が明確化される。
第十八論文 感謝	**因果語彙の整理**	**変更前**:「受け取り続けたことの構造的**結果として**、感謝が生まれる」 → **変更後**:「受け取り続けたことの構造的**顕れとして**、感謝が成立している。感謝は『生まれる』ものではなく、縁起顕現の構造そのものとして常に成立している。」 「結果として生まれる」という時間的・因果的記述を、「顕れとして成立している」という構造記述に置換。

2-4. その他改訂6論文の方向性

第一・第二・第六・第十・第十二・第十六論文では、共通して以下の方向の語彙整合・記述精緻化が施された。

- 「**統合**」「**反転**」等の旧語を避け、「**通過**」「**顕れ**」「**位相の同時成立**」に置換（第十六論文において特に徹底）
- 「**帰結**」「**結果として**」等の因果語彙を「**顕れ**」「**様態**」「**成立**」等の構造記述語彙に置換
- 各論文間の参照関係の明確化（基底→運用の方向性の徹底）

3．意識サイクル 原文版 の差分

3-1. 改訂内容（4箇所）

v3 では「基底→運用」原則を徹底し、サイクル原文中で論文集の引用キー（Okazaki, 2026aa等）を一切使用せず、サイクル内章（⑳）への自然な参照のみとした。改訂は次の4箇所である。

改訂	該当章・節	改訂内容
①	⑲第5節 ⑮〜⑱の振り返り部	「曼荼羅の構造は**後の論文で完結する**」→「曼荼羅の構造的展開は**⑳「曼荼羅で生きるということ」において扱われる**」
②	⑯第5節 曼荼羅・宝塔・本然の我末尾	**⑳への接続段落を新規追加**:「なお本書における『曼荼羅』は、⑳において本然曼荼羅（理の構造図）・色相曼荼羅（智の作用図）・宝塔（両者の同時成立）として完全に展開される。⑯で立ち上がる『私たちと共にここに在る風景』は、その展開の入口に位置する記述である。」
③	⑲補稿光源仮説 第三層記述部	**⑳への接続段落を新規追加**:「第二層における宝塔は縁起の通過回路として立ち上がり、第三層においてはその区別が不要になる。これは⑳で展開される本然曼荼羅・色相曼荼羅の同時成立構造の三層的位相変化として記述される。光源仮説における第三層の『主体不在・器不定・内外消失』は、この区別が不要になる位相の発光様式として読まれる。」

改訂	該当章・節	改訂内容
④	⑱A第2節 縁起＝神経 神経系定義	「神経系とは**縁起の網が局所的に形をとった構造である**」→「神経系とは**縁起網のフラクタルな局所顕現である**」 **追加**:「ここでいう『フラクタル』とは、縁起の構造が異なるスケール（細胞・組織・個体・社会）にわたって同型的に再現されているという構造的同型性の記述である。」

3-2. 章ごとの変更状況（改訂箇所のみ）

章	章タイトル	変更内容
⑯	ダメ人間〈実存的変容Ⅱ〉	改訂②
⑱A	神経系とは何か〈実存的変容Ⅳ-1〉	改訂④
⑲	第二層への実存的相転移〈実存的変容Ⅴ〉	改訂①
⑲補稿	光源仮説	改訂③

上記4箇所以外の章（表紙・前書き・対話・目次・前個①〜⑦・個⑧〜⑭・⑮・⑰・⑱B・⑱C・⑱D・⑳・㉑）は内容同等。

4．意識サイクル 分かり易い版 の差分

4-1. 軽微な内容追加（2箇所）

小学5年生向けの「分かり易い版」では、改訂①と改訂④に対応する原文版の文言が存在しないため、改訂②③のみ反映した。

改訂	該当ページ	追加内容
②	P160 ⑯第5節末尾	新小節「⑳への橋渡し」を追加:「ここで定義した曼荼羅・宝塔・本然の我は、⑳『曼荼羅で生きるということ』で本然曼荼羅（理）・色相曼荼羅（智）として開かれる。⑯はその展開の入口だ。」
③	P250 ⑲補稿 第三層末尾	1行追加:「⑳では本然曼荼羅・色相曼荼羅の区別が不要になる位相として扱う。」

5．差し替え用の最終成果物

◆ 成果物パッケージング

v3版は閲覧用の確定版である。出版チームへの差し替え提出資料は **PDFに統一** する。HTMLは著者側の手持ち資料として保管する。

5-1. v2版（提出済み・保管用）

- 閲覧_論文原文冊子v2.pdf（214p・全22本＋統括）
- 閲覧_論文簡易冊子v2.pdf（58p・25章）

- 閲覧_意識原文冊子v2.pdf（238p・⑱4本＋⑳⑳）
- 閲覧_意識簡易冊子v2.pdf（283p・⑱4本）

5-2. v3版（最新・提出用）

- 閲覧_論文原文冊子v3.pdf（226p・改訂10論文反映）
- 閲覧_論文簡易冊子v3.pdf（58p・第十五・第十七論文の語彙改訂）
- 閲覧_意識原文冊子v3.pdf（235p・⑯⑱A⑲⑲補稿の改訂4箇所）
- 閲覧_意識簡易冊子v3.pdf（283p・⑯⑲補稿への⑳接続加筆）

5-3. 著者手持ち資料（HTML版）

- 閲覧_論文原文冊子v3.html（668KB・ダーク背景・明朝体）
- 閲覧_論文簡易冊子v3.html（139KB・クリーム背景）
- 閲覧_意識原文冊子v3.html（370KB・ダーク背景・明朝体）
- 閲覧_意識簡易冊子v3.html（1130KB・クリーム背景）

6．差し替え方針の提案

◆ 推奨アプローチ

v2提出版4冊すべてについて、v3への全面差し替えを推奨する。

理由:(1)改訂は「基底→運用」原則の徹底であり、論文集と意識サイクルの整合性に直接関わる。(2)論文集側の改訂10論文と意識サイクル側の4箇所改訂は対応関係にあり、片方のみ差し替えると整合性が崩れる。(3)核心命題に変更はなく、既存読者に混乱を与える要素は無い。

ただし、本理論体系は**継続的に展開・精緻化されており、今後も改訂が見込まれる**。v3はその時点での最新確定版という位置づけであり、恒久固定ではない。第二十三論文（死と再生）・第二十四論文（螺旋仕組み）・第十九論文（儀式・スートラ・密教的実践）・第二十論文（物語論文）の整備に伴い、関連する論文集・意識サイクルへの連動改訂が予定されている（詳細は7-2を参照）。

6-1. 差し替えの優先順位

1. 閲覧_論文原文冊子v3.pdf — 改訂10論文の差し替え（基底側の最重要更新）
2. 閲覧_意識原文冊子v3.pdf — ⑯⑱A⑲⑲補稿の改訂4箇所（運用側の整合更新）
3. 閲覧_論文簡易冊子v3.pdf — 第十五・第十七論文の語彙改訂
4. 閲覧_意識簡易冊子v3.pdf — ⑯⑲補稿への⑳接続加筆

7．付記

7-1. v3 における原則の徹底

v3では以下の原則がさらに徹底されている:

- **基底→運用の方向性**:論文集（基底）は単独で完結し、意識サイクル（運用）は基底から自然に展開する形態。サイクル原文では論文集の引用キー（Okazaki, 2026aa 等）を使わず、サイクル内章（⑳）への自然な参照のみとした。

- **言語の中立性**:「結果として」「形成された」等の因果語彙を「末に」「顕れとして」「成立した」等の構造記述語彙に置換。
- **フラクタル概念の導入**:第十三論文（神経系）および⑱A（意識サイクル）において、「縁起の網が局所的に形をとった構造」を「縁起網のフラクタルな局所顕現」に再定義。異なるスケール（細胞・組織・個体・社会）における同型的再現として明確化。
- **本然・色相の関係構造**:第十七論文および⑯⑲（意識サイクル）において、本然曼荼羅（理の構造図）と色相曼荼羅（智の作用図）の同時成立構造として宝塔を位置づけ。

7-2. 今後の展開予定（解体新書 報告書４との同期）

解体新書バージョンⅡ構想（全２３章）の確定に伴い、論文集（基底）には以下の未執筆論文の整備が必要となる。三座標構造（基底→運用→実装）の原則に従い、解体新書バージョンⅡの新章執筆に先立ち、対応する基底論文を完成させる。

論文番号・タイトル	対応する解体新書の章	執筆優先度
第二十三論文「死と再生の構造的定義」	ch20 死と再生	**最優先**
第二十四論文「螺旋仕組みの定義」	全体構造の基底	**最優先**
第十九論文「儀式・スートラ・密教的実践の構造的定義」	ch21 三点セット	**高**
第二十論文「物語論文:本然生成の物語的定式化」	ch22 曼荼羅が消える場所	**高**

意識サイクル（運用）は、上記論文集改訂と連動して⑲⑳㉑を改訂し、第二十三論文以降の追加に連動して㉒以降を更新する。

8．編集方針の決定（v3確定時の重要決定事項）

◆ 論文集 分かり易い版（簡易版）の作成中断

v3確定をもって、論文集（基底）の分かり易い版＝簡易版の作成を中断する。これまでは閲覧者の読解力を考慮し簡易版を作成してきたが、**空観を指さす基底を簡易方便にすることは本シリーズの主旨に見合わない**。基底論文である論文集は、その記述様態そのものが構造の現れであり、平易化はその構造を毀損する。

したがって、論文集 分かり易い版（閲覧_論文簡易冊子v3.pdf）が簡易版の最終版となり、これ以降の版は作成しない。

◆ 意識サイクル（運用）の簡易版は継続

運用にあたる意識サイクルは、**簡易版の作成を継続する**。意識サイクルは基底（論文集）の運用形態であり、読み手の現在地に即して開かれることが運用の定義そのものである。簡易版の存在は運用の本義に見合う。

◆ 解体新書（実装）の作成方針

実装にあたる解体新書は、今後**優しい版に見合った作成に準ずる**。論文構成に偏った作成は行わない。解体新書は「論文集の章立てを翻訳する」ものではなく、読み手の現在地から立ち上がる位相変化の実装である。論文の構造を逐一なぞる形式は、実装の主旨に反する。

8-1. 三つの方針の構造的整合

この三つの方針は、本シリーズの「基底→運用→実装」の階層構造と整合する:

階層	該当冊子	v3以降の方針
基底	論文集 原文版	引き続き正本として更新・展開
基底（簡易）	論文集 分かり易い版	**v3を最終版として作成中断**
運用	意識サイクル 原文版	引き続き運用形態として更新・展開
運用（簡易）	意識サイクル 分かり易い版	**継続作成（優しい版に見合った形式）**
実装	解体新書（実装版）	**論文構成に偏らない、優しい版に準じた形式**

8-2. この決定の意味

基底（空観を指さす論文集）を簡易方便にすることは、指し示しの構造そのものを言語化された方便に置き換える操作であり、本シリーズの「基底は記述様態として構造を現す」という前提と矛盾する。簡易版は方便としての価値を持つが、それは運用層の機能であり、基底層の機能ではない。

v3 確定によって、本シリーズは「基底は基底のまま、運用は運用として開かれる」という階層的整合の確立段階に入る。